

地方局アナウンサーのキャリア発達に関する予備的考察 2

—アナウンサーを超えて—

A Preliminary Study on the Career Development of a Local Station Announcer 2

— The Leap from Announcer to Broadcaster —

北 出 真紀恵*

Makie KITADE

キーワード：アナウンサー、アナウンスの技術、放送の送り手、価値判断能力

Keyword: announcer, announcement skills, broadcaster proper, ability to judge news value

要約

本稿は、地方局に勤務するアナウンサーのキャリア発達に関して予備的考察を行うものである。アナウンサーの職能の変遷は北出（2008、2012）によって分析され、また、アナウンサーの専門性への疑問が1980年代後半に表出したことが、北出（2015）によって指摘されている。

本研究では、現在、地方局でアナウンサーとして活躍するアナウンサーにインタビュー調査を行った。アナウンサーの専門性が問われた80年代にアナウンサーとして採用された調査対象者は、キャリアを積む中で「アナウンスの技術」から「伝える内容」へと興味を移し、プロデューサーでもあり、ディレクターでもあり、アナウンサーでもある「放送の送り手」として活躍している。現在、アナウンサーがアナウンサーとして活躍するためには、専門職としての「アナウンスの技術」だけではなく、「放送の送り手」としての価値判断能力が試されている。

Abstract

This paper presents a preliminary study on the career development of announcers in a local broadcasting station. Changes in announcers' professional skills were examined by Kitade (2008, 2012) and the question of announcers' professionalism as expressed in the latter half of 1980s was examined in Kitade 2015. The author interviewed a senior local broadcasting station announcer. The interviewee's interest had shifted from announcements to making programs in which he was announcer, director, and producer, that is, broadcaster proper. The paper concludes that present-day announcers need not only announcement skills but also

* 東海学園大学人文学部人文学科

the ability to judge news value.

はじめに

本稿は、アナウンサーのキャリア発達に関して、予備的考察を行うものである。

北出(2012)においては、組織の中でアナウンサー職を離れて管理職に従事する元アナウンサー2名へのインタビュー調査から、アナウンサーであることから離れることに強い抵抗を感じつつも、地域社会における「メディアの送り手」としての自負をもち、放送メディアの担い手としてのキャリアを紡いでいる事例を検討した。北出(2015)では、アナウンサーの職能は技術の進歩やメディア社会化を背景に時代とともに変化してきたが、とくに80年代にその専門性が問われたことが指摘されている。

本稿では、大きな変換期であった80年代後半にアナウンサーとして採用され、現在、管理職世代として若手アナウンサーの採用や教育に携わっているベテランのアナウンサーの事例を追加することで、現代的なアナウンサー像への接近を試みる。

アナウンサーというと、さながらタレントのようにテレビやラジオ番組に出演する公共放送の東京局や民間放送キー局のアナウンサーをイメージしがちだが、そうしたスターアナウンサーたちは、アナウンサーという職業人のなかではほんの一握りの存在である。全国にはあまり知られていない多くのアナウンサーたちがおり、彼ら・彼女らは今日も、日々の業務としてマイクに向かっていく。公共放送では500人を超えるアナウンサーがおり、多くのアナウンサーはそのキャリアの多くを地方局の転勤で過ごすことになるという。民間放送においても、一部のスターアナウンサーを除けば、アナウンサーという職業人は地域の情報やニュースを爾々と伝える職人的存在であるといつてよい。

本稿で考察の対象とするのは、そうした地方局で地道に日々の放送活動に従事する放送人たちである。彼ら・彼女らの存在があつてこそ、地域の放送が支えられている。従つて、地方局のアナウンサーに光を当てることこそ、アナウンサーという職業の実像に迫る事になるのではないかと筆者は考えている。

筆者の関心は、専門職の職業人としてキャリアをスタートさせながら、組織の中で専門人としてのアイデンティティを持ちつつ、いかにその枠を超え、活躍することが可能かということにある。

本研究の予備的考察を糸口にして、アナウンサーという職業のキャリア発達における現代的課題にアプローチしつつ、組織の中の専門職業人を相対化するための一助となれば幸いである。

1 アナウンサーの専門性のゆらぎ

本節では、北出(2008)を参照しながらアナウンサーの職能の変遷をみておこう。

アナウンサーは、放送メディアとともに誕生した新しい職業であった。

1925年、東京放送局開局当時のアナウンサーたちは、新聞記者、教員や歌手などの前歴を活かし、マイクロホンの前に立った。当時は、アナウンスの基準などまったく存在していない。

しかしながら、この新しい職業人たちは放送の話者としての業務を担わなければならない。

放送の草創期には「放送のことば」は標準語であるべきで、その標準語とは東京のことばを基本として成り立っており、「標準語を操る」ことを修得することは特殊な技能であると考えられていた。東京出身であることが採用の基準であった時期もある⁽¹⁾。しかし、標準語そのものも確立しているわけではない。

以降、新しい職業である「放送のことば」の担い手・アナウンサーたちによって、アナウンスの表現技術は模索され、開発され、洗練化されてきた。標準語（のちに共通語）とは何か、放送にふさわしいことばとはどのようなものか、アナウンスはどうあるべきか、あるいはアナウンサーの職能とは何かといった問題群とのアナウンサーたちの苦闘は、放送メディアの歴史とともにある。

職業の誕生当時は「標準語（共通語）」の伝達者として位置づけられていたアナウンサーであったが、放送技術の進歩に伴う放送文化の発展とともにアナウンサーの職能は多様化してゆくことになる（北出、2008）。

現在においても、アナウンサーの職能とは、情報を正確な日本語（共通語）で伝えることが第一義とされている。正しい発音、正しいアクセント、そして一言一句間違ふことのない正確なよみ（音読：「読み」と区別するために「よみ」と表記）。加えて、わかりやすく伝えるためのプロミネンスやポーズといった表現上のスキル。こうした技能を会得し、熟練化させていく「職人芸」ともいうべき技能の修練には、終わりはない。

しかし、放送メディアが一般化する60年代になると、アナウンサーの「個性のなさ」に批判が集まるようになる。アナウンサー教育が洗練されていくに従い、アナウンサーらしくよむための訓練が施されるようになると「アナウンサーのよみは同じに聞こえる」というのだ。こうした批判の背景には、放送メディアに対する人々の関心の高まりや、民間放送局のあいつぐ開局、また、コンテンツ開発によるアナウンサー以外の放送出演者の増加が背景にあった。アナウンサーにとってアナウンス技術と個性（タレント性）の相克という問題は決して新しいものではなく、アナウンサーという職業あるいは職能自体に内包する問題なのである。

60年代、70年代の高度経済成長とともに放送メディア産業は大きく発展を遂げ、目をみはるような技術革新を背景として、放送のコンテンツは成熟期を迎える。特にテレビが長時間の生放送の時代にはいつてからは、アナウンサーたちに期待される役割は多様化し、「共通語」をはじめとした「よみのスキル」だけでは、まったくもって対応できない時代が到来した。テレビ出演者のボーダーレス化が進行する中で、「アナウンサー不要論」まで飛び出した。

アナウンサーの専門性の揺らぎが最も表面化したのは、80年代である。80年代はマス・メディアの発達によって日本語の均質化がほぼ完成したとされる社会言語学による知見もある（真田信治、1991）。つまり、「共通語」は特殊な技能とはいえなくなったのだ。

また、80年代には、アナウンサーらしさを攪乱することによって、アナウンサーらしくないスターアナウンサーが人気を博し、タレントとして活躍するようになった。また“女子アナブーム”が到来するなど、アナウンサーの専門性とは何かという問題が先鋭化することになった。

80年代は、アナウンサーという職業人にとって、自らの職能を問い直さざるをえない時期であった（北出、2015）。

2 アナウンサー採用の変化

一般的に、アナウンサーの採用試験は、放送局の職員採用試験において、アナウンサー職（専門職）として別枠で実施される。そこでは、マイクテストやカメラテストが課され、アナウンサーとしての適性が試されるのだ。

採用方法が別枠なため、アナウンサー志願者はそうした採用試験対策のため実技の訓練を受ける者が多い。

アナウンサーの採用を担当していた元アナウンサーのAさんとBさんは最近の採用傾向について、次のように述べている。

しゃべることは当たり前みたいになっている。日本人なら日本語しゃべれるのは当たり前。あとはレポートしろよ。アナウンサーと記者の区別なくなってきた。厳密に言うと、しゃべりの基礎を知ってるか知らないのとはずいぶん違うだろうし。習ったところで下手は下手、習わなくても上手いのは上手いってところはあるからね。（Aさん）⁽²⁾

この仕事おもしろそうだな、やってみたいなって感じ。終身雇用とも思ってない。今の子どもたち全然違う。（Bさん）⁽³⁾

以上の語りからわかることは、最近では、採用に際しては「共通語」や「アナウンス」「しゃべりの基礎」ではない「何か」が重要視されるようになったことである。それでは、この「何か」とは一体何だろうか。

本研究で筆者のインタビューに応じてくれたのは、地方局で活躍中のCさん⁽⁴⁾である。Cさんは、大学での部活動ではじめてアナウンサーという職業を意識し、87年にアナウンサーとして放送局に採用された。Cさんの職業人としての関心の移り変わりは、キャリアを積みながらアナウンサーがアナウンサーを超えていく道のりでもある。

以下、Cさんが筆者に語った言葉を引用するが、【】は筆者による注釈、[]は内容をわかりやすくするための筆者による補足を意味する。

まずは、Cさんがアナウンサーをめざすことになったきっかけについて聞いてみよう。

大学の放送部にはいったから。強く思ったわけじゃないんだけど。高校は男子校。なんか文化系で楽しいところないかな、女の子が多いところないかな。それで、放送部。アナウンサーパートに入って。【アナウンサーになろうと思ったのは】先輩の影響。そうなんだ、アナウンサーって【実際に】なれるんだ。このクラブって、そんなんでできるんだ。最初は学校の先生になろうと思ってたのが、それが消えていった。(中略)スポーツ実況目指してるやつ(同級生)がいて。【出身の】高校が甲子園出場校。実況したいなって。

Cさんが入部した大学の放送部は総勢100人を擁する大所帯で、毎年、複数名のアナウンサーを輩出していた。従って、ロールモデルも複数あった。アナウンサー試験を受験し、実際に放送の世界で活躍する先輩たちの姿を目の当たりにすることで、別世界だったアナウンサーという職業が卒業後の進路として現実的なものとなっていった。また、出身高校が甲子園大会出場校だったこともあり、野球中継の実況に興味をわいたという。アナウンサー養成の専門学校にも通い、放送部の仲間たちと、ともに「実況」の練習にいそむようになった。

そして、2年にわたる受験を経て、アナウンサーとして採用されたCさんは、当時をこう振り返っている。

うちでも【研修は】1か月弱。アナウンサーはいらないって、言い出していて、「アナウンサー不要論」のとき。テクニクはいらない【という議論が盛ん】。研修なんて、ほとんど職員としての研修。現場で教えてもらえ。でも、全然教えてくれない。ラジオのニュース、それに、テレビのおしらせ。アナウンサーといえど、よむだけじゃないんだって。

Cさんが採用試験を受けたのは80年代後半である。この時期は、アナウンサーという職業に逆風が吹き荒れた時期であった。テレビが成熟期を迎え、報道番組にはアナウンサーではない記者や文化人たちがキャスターとして出演し、娯楽番組の進行にはタレントたちが起用されるようになり、アナウンサーたちは、テレビの脇役へと追いやられてしまう。アナウンサーたちは、それまでの「アナウンサー、らしさへの批判を受け止め、アナウンサーらしさの改革へ、アナウンサーの個性への探求がさかんに模索された時代であった(北出、2015)。

Cさんの同期採用のアナウンサーは20名である。このうちアナウンスの実技経験者(アナウンス専門学校出身者)は4名で「いろんな人がいた」(Cさん)という。実技経験の有無を問わず、

出身地や出身大学も様々であり、多彩な人材を採用しようという意図が見て取れるが、アナウンスメントの技術が採用の可否を決めたそれまでとは、明らかに採用基準も変化している⁽⁵⁾。「共通語」や「アナウンス」、「しゃべりの基礎」(Aさん)ではない「何か」とは、いったい何だろうか。

次節では、この「何か」に接近するべく、もう少しCさんの語りに耳を傾けてみよう。

3 アナウンサーを超えて

スポーツの実況アナウンサーを志したCさんは、のちに甲子園大会の実況を担当し、あこがれの舞台にも立った。夢を実現させたことになる。しかし、日々の業務の中でCさんの興味は、別の方向へと向かっていくことになる。

【スポーツ】実況、「前畑がんばれ、前畑がんばれ」⁽⁶⁾とか、あこがれてた。歴史に残る名実況ね。それはでも、30過ぎくらいまでかな。ひとつには、スポーツっていうのは舞台ができてるじゃん。舞台はできてて、そこをやる。その人の視点があって、料理はできるけど、材料は決まってる。材料が決まってるのはもういいかな。自分で材料みつけて、自分で料理する方がおもしろいかな。

Cさんが「自分で材料をみつけて、自分で料理する」ことのおもしろさにめざめるきっかけとなったのは、とあるボランティアショップの取材だったという。中古の品物を集めて、カンボジアを支援する活動の取材から、当時、日本では知られていないカンボジアの状況について伝える番組の企画提案、そして制作するという経験を経て、Cさんはアナウンサーから、アナウンサーでもあり、プロデューサー、ディレクターでもある放送人へと変貌してゆく。

アナウンサーで制作するのは、日々の制作は、普通にやってる。アナウンサーも記者クラブ入って取材するって【という放送局も】あるけど。アナウンサーも、レポート作ります。提案したら【番組制作も】できる。道は開ける。

本稿の冒頭でも述べたが、公共放送の東京局や、民放在京キー局のアナウンサーのようにタレントのように活躍するアナウンサーはほんの一部である。日本全国にある地方局のアナウンサーたちは、日々の運行業務⁽⁷⁾に従事しているのであり、それは組織の「歯車」であり「駒」(Cさん)としての日常である。

いっちゃうと、割り振られる仕事はない、ぼーっとしてると何にもない。ローカル局のシ

ニアとか、何もしなくてもすんでいくと思う。

組織の「歯車」としての運行業務は日々の放送活動を支えるうえではなくてはならない必要な業務である。かといって、地方局では、自局の制作番組数も限られ、与えられる仕事を待っているだけでは、本当に組織の「歯車」以上の仕事には出会えない、というわけだ。

もちろんCさんも日々の運行業務を遂行しながら、また管理職世代として、新人や後輩の指導にもあたっている。それらは、彼の言葉を借りるならば「歯車」としての大事な業務である。そして、また「歯車」の品質管理はなされなければならない。

新人の指導はテクニク。とりあえず、気持ちが前に出てない。伝えるぞという気持ちがないんだ。カメラの向こうに視聴者がいるという認識というか、仕事だからよんでるんですというのはね、まずはそこから。今、プロミネンス、わかってよんでるのか。原稿、これとこれ、切ったらダメだろ。2か月前まで学生だったんだから、本質的な部分ができてるかどうか。アナウンサーに必要なことは、やる気。技術は必要。

Cさんは、まずアナウンサーに必要なことは「伝えるぞという気持ち」であるという。アナウンス原稿に書かれた文の主語は何で、述語は何か。修飾語はどれにかかるか。そして、文章のキーワードは何か。そうした文章の理解は読み書きの基本で、「伝える」ことの基本であるが、アナウンスメント以前の問題である。当たり前なことだが、それらを理解したうえで表現上の技術を修得することが、「だれにもわかるアナウンス」へとつながってゆくのだ。正しいアクセントや発音、美しい滑舌もちろん大事ではある。しかし、その前にアナウンサーにはことばを紡ぎ出してゆくものとしての基本的能力が必要とされる。それらは、記者や制作者をはじめ、すべての放送文化の表現者として当然、必要な能力である。

北出(2008)は、公刊されたアナウンス教本である『アナウンス読本』から『アナウンス・セミナー』の内容を検討することで、アナウンサーの職能の変遷を追ったものである。ここでは、80年代の変化に注目したい。

80年に公刊された『NHK 新アナウンス読本』は、それまでのアナウンス読本と同じように、共通語の発音・アクセント・語り口調をはじめとする基礎編、そして実用的な応用編とに分かれていた。また、アナウンサーの役割については、アナウンサーとは番組の「歯車」のひとつであり、番組という形をとる情報伝達の中で、多くの職種が準備を重ねた最後の段階で音声言語による表現を担う職種であり、アナウンサーは番組の主役ではないとされている(日本放送協会編、1980)。放送番組の中では、主役はあくまでも“情報”である。この、番組の「歯車」たれという考え方は、公共放送、民間放送を問わず、出演者でありながら徹底的に脇役であろうとするアナウンサーと

いう職業人たちに共有されている職業観とってよい。

一連のアナウンス教本に変化がみられたのは、このあと公刊された『NHK アナウンス・セミナー』(1985)であった。北出(2015)でも指摘されたように、80年代はアナウンサーという職業人にとっては「アナウンサーとは何か」という問題が最も先鋭化した時代でもある。そして、『NHK アナウンス・セミナー』は、アナウンサーやアナウンサー志望者を対象にして書かれた『アナウンス読本』とは違ってかわって「アナウンサーをはじめとする放送の送り手」に向けて書かれた。1985年のことである。

同書は、放送の送り手が自由化・多様化し、プロ・アマ混在時代といわれるようになって「アナウンサー、記者に限らず、今後ますます多様化する放送の送り手として生きようとしている人」を対象に編まれているのが特徴である(日本放送協会編、1985)。

そして、それから20年を経た『新版 NHK アナウンス・セミナー 放送の現場から』(2005)では、50人近いアナウンサーたちがそれぞれの放送の現場で何を考え、どう伝えたのかを執筆する現場主義の構成となっている。

巻頭の「はじめに」で、当時アナウンス室長の山根基世は「今、アナウンサーに求められているのは実に多様で、しかも高度なものになって」いるとしたうえで、「担当する番組ジャンルにより、また人により、百人百様の方法をとりながら、しかしすべてのアナウンサーの思いが『より良い放送を出したい』という一点に収斂されているのを見るとき、こうした“振る舞い方”の集積や伝統こそ、『放送の文化』なのではないか」と述べている(日本放送協会編、2005)。

既刊の『アナウンス読本』では放送表現の基礎が最初にあげられ、共通語の説明が行われていたが、放送文化の成熟化に伴い番組進行における実用的な応用に注目が集まり、それらが前景化してくることで、ことばの基礎の部分は後退してゆくことになった。放送表現の基礎については『新版 NHK アナウンス・セミナー』では最後にふれるにとどまっている。

ふりかえれば、アナウンサーがアナウンスの技術だけで通用しなくなって久しい。

アナウンサーには百人百様の現場があり、スタイルがある。そして、それぞれの方法がある。それらはすべて「より良き放送」のためにある。

元アナウンサーのAさんは定年前にはディレクター職を兼任しつつ「より良き放送」のために尽力した。「良い放送を届けたい」と願うAさんの職業アイデンティティは「放送マン」であり「制作現場」の人であった(北出、2012)。

Cさんも地方局の仕事がおもしろさは「現場に近い」ことにあると述べている。そして、Cさんの仕事は新人の指導や運行業務にとどまらない。

夕方のニュース番組。メインの。そこの編責(編集責任者)。オーダーを組んでる。ニュースのデスク3人、報道のデスク、カメラのデスク、6人でまわしてる。ちょこちょこレポート

作ってて。4月から編責のローテーションに入ってる。

夕方のニュース番組は、地方局においては花形の舞台である。また、編集責任者は、経験を積んだ報道職の仕事である。地方局で人手が足りないとはいえ、局内での信用と実績がないとそうしたポジションにつくことはない。Cさんは、制作者としても局内で認められているのであろう。

しかし、その一方で、何十年も努力を重ねてきたアナウンスの技術を活かしたいとは思わないのだろうか。

しゃべりたいは、あんまりない。伝えたい、はあるけどね。放送って何のため。見ている人、聞いている人のためだから。

Cさんはアナウンサーではあるが、「あんまり出たいという欲求はない。もともとない。」と述べている。彼によれば、アナウンサーとは「見ている人のためになる情報を伝える人」だという。

アナウンサーに必要な「何か」とは何だろうか。Cさんに聞いてみた。

人間発信力。どうアンテナをはって、どう発信していくか。素直に吸収しつつ、育っていくかだろうなあ。

「何を伝えるか」「どのように伝えるか」は、表現者にとっていわば車の両輪である。どちらが欠けても成立しない。前者は価値判断、そして後者は送り手としての表現技術である。アナウンサーの訓練は、後者の技術「どのように伝えるか」にばかり傾斜しがちで、うまく話すことに終始しがちであった。それは、伝えるべき情報がシンプルで、放送番組の様式が単純であった時代において、ディレクターやアナウンサーといった職種別の分業が成立した頃の話である。ところが、放送文化の成熟化に伴い、アナウンサーたちにも「何を伝えるか」の価値判断が期待されるようになった。

番組制作における価値判断や、進行時における価値判断は、マニュアルや学校教育などの知識で身につけられるものではない。そうした熟練技能は刈谷寿夫（1995）によれば、ゼネラリストやコンサルタントと共通したプロセス専門家の特性である。刈谷が考察の対象としたのは、組織内準専門職としての新聞記者であるが、メディア産業における記者や制作者同様、アナウンサーたちの放送の現場における価値判断能力は、OJTで修得される熟練技能であり、「現場経験」を積み以外に道はないといえる。

そして、その「現場経験」はアナウンサー百人百様である。伝えることの「何か」も百様であ

る。伝えたい「何か」の「歯車」として、放送番組の「歯車」として在ること、アナウンサーがアナウンサーであることの職務を全うしようとするのは「出演しない」「アナウンスしない」という意味においてはアナウンサーではないのだが、「歯車」でいることは、どこまでもアナウンサーであることでもあり、同時に、アナウンサーを超えることでもある。

4 アナウンサーから「放送の送り手」へ

アナウンサーたちは、現在も放送文化の最前線で試行錯誤を重ねている。

放送文化の成熟化の過程で放送出演者のボーダーレス化が進み、アナウンサーへの期待、あるいはアナウンサーの役割が不透明化した。アナウンサーたちの「アナウンスの技術」の存在価値が評価されづらくなっているのも事実だ。

一方で、今日では、「何を伝えるか」つまり放送番組のコンテンツがあまりにも多様化し、放送番組の出演者としてのアナウンサーに求められる業務は増加し、複雑化し、専門化している。

アナウンサーという職業が誕生して90年。アナウンサーたちによって磨き上げられてきた「話しことば」の技能は、もはや特別のものではない。このことは、まぎれもなくアナウンサーたちの功績であり、ひとつの到達点である。そして、アナウンサーたちは、自らのアナウンサーの改革を経て、「アナウンサーとは何か」という問題に取り組み、スペシャリストとしての技能に固執することなく、放送文化の送り手として格闘を続けている。

現在のアナウンサーには、報道、スポーツ、エンターテインメントといったあらゆるジャンルで、それぞれが専門的知識を得、経験を積み、良質な放送文化の制作集団のひとりとしての能力が必要とされている。それは、「放送の送り手」としてニュースや情報の価値判断をし、発信する力であり、現在の放送文化の中で、「放送の送り手」としてのプロフェッショナルな能力なしにアナウンサーが活躍することは望めない。

常にエンプロイアビリティが問われるアナウンサーという職業をめぐる環境は厳しい。しかし、現場経験のなかで判断力と発信力を磨くことによって、制作者として番組を送り出すことも、報道職として優れたジャーナリストをめざすのも、時にはタレントのように放送素材としてふるまうことさえも、アナウンサーを超えたアナウンサーのありようのひとつとはいえないだろうか。

日々の放送の現場に立ち、それぞれのアナウンサーのありようを模索し、活躍を続ける「放送の送り手たち」にエールを送りつつ、稿を閉じることにしたい。

(1) アナウンサーはすべて東京で採用しようという機運があがり、1934年1月に第一回の採用試験が行われた。この時の採用者たちは、ことばの標準化を目的としたアナウンサー教育を初めて受け、一期生と呼ばれる。(NHK アナウンサー史編集委員会編、1992)

- (2) Aさん：元アナウンサー。地方テレビ局を経て、地方ラジオ局報道制作部長。Aさんへのインタビューは2011年9月23日に実施された」。
- (3) Bさん：元アナウンサー。地方ラテ兼営局 ラジオ編成制作局長。Bさんへのインタビューは2011年10月8日に実施された。
- (4) Cさん：地方ラテ兼営局アナウンサー。Cさんへのインタビューは2014年10月4日に実施された。
- (5) 筆者が知る限りにおいても、80年代後半以降には、公共放送・民間放送問わず、一般職で受験した際、アナウンサー職ではどうかと振り分けられた事例もある。
- (6) 1936年8月11日ベルリンオリンピック女子水泳平泳ぎ200メートル決勝の実況中継。河西三省アナウンサーの実況では、「前畑がんばれ」が24回連呼された。前畑秀子選手は日本女子で初めて金メダルを獲得した。「前畑がんばれ」は放送史に残る名実況とされている。
- (7) 定時ニュースやお知らせなど、ローテーションを組んで担当する業務のこと。

<文献>

- 刈谷寿夫, 1995. 組織内準専門職のキャリア研究—新聞記者の場合—, 六甲台論集 42(2)巻 経営学編. 神戸大学大学院経営研究会, 61-75.
- 北出真紀恵, 2008. “声”のプロフェッショナル—アナウンサーの職能の変遷—. 東海学園大学研究紀要第13号, 53-69.
- , 2012. 地方局アナウンサーのキャリア発達に関する予備的考察—組織のなかで〈アナウンサー〉を生きることの意味—. 東海学園大学研究紀要第17号 人文科学研究編, 63-75.
- , 2015. 女性アナウンサーの八〇年代—「アナウンサーらしさ」の改革の後で—東海学園 言語・文学・文化 第14号. 東海学園日本文化学会, 9-18.
- アナウンス・セミナー編集委員会編, 2005. 新版NHKアナウンス・セミナー 放送の現場から. NHK出版.
- NHKアナウンサー史編集委員会編, 1992. アナウンサーたちの70年. 講談社.
- 日本放送協会編, 1955. アナウンス読本. 日本放送出版協会.
- , 1962. テレビラジオ新アナウンス読本. 日本放送出版協会.
- , 1970. NHKアナウンス読本. 日本放送出版協会.
- , 1980. NHK新アナウンス読本. 日本放送出版協会.
- , 1985. NHKアナウンス・セミナー. 日本放送出版協会.
- 真田信治, 1991. 標準語はいかに成立したか. 創拓社.